

造山遺跡群周辺の遺跡変遷と沼柵

島田祐悦（横手市教育委員会）

1. はじめに

横手市西部に位置する雄物川町造山周辺は、近年の発掘調査において雄勝城推定地として有力になってきた場所である。地名の由来については定かではないが、造山（つくりやま）という読みから、古墳に由来することが想定される。約200年前に菅江真澄が『雪の出羽路』に、造山の蝦夷塚から勾玉が出土したことを古墳らしき図とともに描いている（宮本他 1976）。そして、古跡・田嶋名の項には、傾城塚・蝦夷塚・狐塚がある。その他には無量寿院という廃寺跡があり、雄勝郡の吉祥寺（三輪山吉祥院）の門流であったとされる。明治初頭の『雲根録』には、真崎勇助が蝦夷塚付近で耳金・勾玉等を取得したと記載されている（三上 1978）。昭和30年に地権者藤田正一氏らが勾玉を発見し、現在は京都国立博物館所蔵となっている。昭和33年には地権者佐藤金一氏が勾玉を発見し、現在は秋田県指定文化財として雄物川郷土資料館で展示されている。

造山大字には多くの遺跡が小面積で点在することから、これを造山遺跡群としてこれまでの公開講座等で総称しているが、本来はひとつの大きな遺跡の可能性もある。また、その周辺域にも遺跡が点在する。今回の公開講座では、周辺も含めて造山遺跡群として取り扱っていくこととする。

2. 沼柵推定地としての造山【図1】

現在の沼柵推定地は沼館城跡と千刈田遺跡周辺を想定しているが（島田 2020a）、戦前の沼柵は造山までを含めた広範囲であったことを大山順造氏が指摘している（大山 1936）。その後、島田亮三氏がこれらを踏まえた結果として「沼柵予想図」を描いている（島田 1988）。

大山氏が述べるところの要点を抜き、少し長くなるが、口語訳に直して引用する。

『六郡々邑記』を開くと沼館は昔「沼館城廻邑」と言ったと見えるが、沼柵と言ったことは書いていない。しかし、古来沼館は沼柵であるとされ、その地形または黒石沼の旧形を脳裏に描いての上に眺めるなら、沼柵という地名にぴったり来る。更に一步を進めて考える時、沼柵といふ名と沼館といふ名とは、共に用いられ、中世において前者を呼称とすることがすたれ、沼館の方が地名として残されたという事になるようである。（中略）

「沼柵」も「沼館」も同一の名称である。もし、沼館は果たして沼柵の遺跡であるかどうかを疑った人があるとすれば、それは現在蔵光院のある地を中心とした小学校付近の城跡が新しいだけに、それのみが城柵の遺跡らしく見えるのである。慶長年間までの武将の住んだところの生々しい遺跡である部分については、もとより清原一族の拠った柵跡はいたるところで原形も変えられていようし、かつ、もともと巧みな構えでなかったとも思われる。しかし、少し注意して見るなら、城柵の遺跡は単に蔵光院中心の一郭のみではない。今宿を越えて、造山、回館から造立神社（虚空蔵菩薩）の土堤にかけて、雄大な一郭の城柵ではなかったか。黒石沼の深く広がった時代を想見すれば、山地を利用した金澤には劣るが防備堅固な申し分の無い地勢である。後三年の役に一幕見せた沼柵というのは黒石沼の地点では無かつたろうか。いかに『前太平記』に「狭い」とあるとしても、「沼館城廻邑」に取り残された部分だけでは、家衡もあの八幡太郎源義家を待ち受ける元気は出ないと思う。（中略）

この猛将を向うに回して、「いざ来い、来れ」という家衡の籠城である。家衡が向う見ずであったと

しても、自身のいる城柵がそこに存在しなければならぬのである。このことから、どうしても柵の中心は造山方面に求めたい。それが後年城柵として利用されなくなり、ただ小野寺氏の使用した一角の城廻の里に「沼館」の名が残されたのであろう。

次に、沼柵は清原武則の出羽にいた頃の本拠地だと伝えられてきた事について考えを進めたい。(中略) 小野寺氏の『角間川旧臣文書』にも「沼館と申す所は横手の西に有り。これは昔の沼柵にして清原武則の古城に御座候」とあり、昔から言い伝えられてきた。死生を度外視して意地を生かし、出羽に馳せ帰った家衡は、全くの死を覚悟した籠城である。柵を祖先武則の旧地に選ぶのは最も自然ではあるまいか。(中略)『陸奥話記』「小松攻め」の項には、兵士深江是則という人物が素晴らしい働きを見せている。これは福地村の深井に関連を感じる。正保四年(1647)の今宿村検知帳の字名に「沼はた、たかはな、みかどや敷」と見えるそのミカド屋敷というは、福地の深井を、「元慶の乱」の深江弥加止に結び付ける有力な材料と思うが、その深江の流れをくむ是則であるとすれば一段と面白くなる。沼館に近接した地名を名とする者の多くが武則に従って陸奥に繰り出したという事も、この地の武則居城を暗示するものである。また、『八沢木遠藤氏系譜』に見える康和元年(1102)[康平四年(1061)の間違ひであるが]の山中騒動に「清将軍武則公より和談」というのもあるのも、武則が沼館住であったからこそ生きてくる記事である。(後略)

島田亮三氏は、上記を踏まえていたと思われ、これを深め周辺の地形・地名と伝説・遺物出土状況等を加味して、「沼柵予想図」を描いた。これは、湿地帯の中の段丘上に複数郭を有する柵を沼柵と想定し、「沼館城」を「沼ノ柵本陣」とし、柵の南端を造山としている点は、大山氏が造山を中心地にしたこととは異なる。造山の場所は柵内で最も広く、造山遺跡群の存在する場所である。十足馬場が地形に沿う形で巡っているように描かれていることは、区画施設の範囲のようで興味深い。

3. 造山遺跡群周辺の地理的環境【図2, 3, 4】

造山遺跡群は、JR 横手駅から西へ 15 km、横手市役所雄物川地域局から南へ 1 km の造山大字を中心とした砂礫段丘Ⅲ面の標高 50.9m の場所に立地している【図2】。この砂礫段丘Ⅲ面は、南東から北西に延びる島状となっており、東西が一段低い砂礫段丘Ⅳ面、北側がさらに低い砂礫段丘Ⅴ面となっている。北東側では大宮川を境界として東側が造山遺跡群と同じ砂礫段丘Ⅲ面が形成されている。

砂礫段丘Ⅲ面とⅣ面との比高差は、砂礫段丘Ⅲ面の造山遺跡群(標高 50.9m)の東側の東槻遺跡付近(標高 49.5m)、南田東付近(標高 48.7m)、そして西側砂礫段丘Ⅲ面縁にある蝦夷塚古墳群付近(標高 48.3m)と砂礫段丘Ⅳ面(標高 46.9m)とでも 1~2m の比高差がある。造山遺跡群(標高 50.9m)西側の砂礫段丘Ⅴ面は標高 45m 前後であり、5m 以上の比高差が形成されており、造山遺跡群は周囲より一段高く見える。北西から見れば急峻な崖を有する台地上にあるように見える。

この造山遺跡群が立地する台地の左右には河川が流れていたことを示し、砂礫段丘Ⅴ面は、近年まで雄物川の影響を受けていたものと思われる。砂礫段丘Ⅳ面に関しては古い段階で河川が流れていたことを示し、西側は雄物川、東側は皆瀬川と考えられている【図3】(小西 1966)。河川は、東より成瀬川と皆瀬川と雄物川の 3 本の河川が並立して北流しながら西側に傾斜していき、最終的に皆瀬川が成瀬川を、雄物川が皆瀬川を受け入れ、現在の流れとなったとしている。

【図4】では、明治時代の地図や昭和 18 年の写真から河川と道を復元し、遺跡の位置図を当てはめたものである(横手市教育 2020)。現在市販されている多くの地図を見ると横手盆地の川は、雄物川に注ぐ横手川と皆瀬川などしか表記されない場合が多いが、無数の小河川が流れていることとなる。

平鹿郡と山本郡(仙北郡)の境界は雄物川に注ぐ横手川とそれに注ぐ杉沢川で、平鹿郡と雄勝郡と

の境界は皆瀬川である。近世以降は新田開発に伴い、河川や堰などが改良されていったと思われるが、基本的に小河川などは多く確認でき、水流の量を調整したものの流れは基本的に変わっていないと思われる。【図4】では、多くの小河川が成瀬川もしくは皆瀬川などから水量を少なくしながらも続いている。現在でも大戸川・油川・大宮川・石持川など準河川的な川も流れており、農業水利事業平面図によれば、成瀬川を示す「N」と皆瀬川を示す「M」幹線水路として取水口が分けられている（秋田県雄物川筋土地改良区 1991）。秋田県雄物川筋土地改良区文献によると、江戸時代初期までの成瀬川と皆瀬川は横手盆地の東南端より西北に向かって盆地中央部を貫流して、別々の場所で雄物川に合流していたが、元和元年～3年（1615～1617）に、佐竹藩による大規模な河川改修が行われてから概ね現在の河川配置が出来上がったとし、皆瀬川を石持川、成瀬川を大宮川・大戸川など推定している。

現在の平鹿郡と雄勝郡との郡境（市境）は、皆瀬川となっているが、上記の複数的要素に従えば、造山のある砂礫段丘Ⅲ面の東側を流れる石持川や大宮川などが皆瀬川であった可能性も高く、これより以西が雄勝郡であった可能性も考えられる。出羽山地側を見ても昭和30年代まで大沢地区は雄勝郡であり、末館窯跡も雄勝郡に一部含まれている。これらのことから造山遺跡群がある場所は、古代では雄勝郡であった可能性は十分に考えられる。

4. 造山遺跡群周辺の発掘調査実施と地形【図5, 6, 表1】

【図5】は、造山遺跡群周辺の地形図とこれまで発掘調査が実施された位置を示したものである。

発掘調査は、遺跡の分布を把握する分布調査、遺跡の範囲と内容を確認する確認調査、消滅する遺跡を記録保存する本発掘調査、遺跡の保全を確認する工事立会がある。調査方法はどうか、ほぼ全域に発掘調査が入っているが、砂礫段丘Ⅳ面では場整備事業による緊急発掘調査が行われ、新発見の遺跡で多くの成果があった。造山集落のある砂礫段丘Ⅲ面は、地形的に高いことから、水回りがあまりに良く、大規模な場整備事業がされなかったためであろう。ここで確認される遺跡は、これまで周知の遺跡として8世紀段階の遺物が採取されていた。

造山周辺では35回の発掘調査が実施されているが【表1】、傾向としては2006年まではほぼ場整備事業に伴う緊急発掘調査で、秋田県・横手市・雄物川町の各教育委員会が調査を実施し、それ以降は払田柵跡の関連遺跡または雄勝城・駅家の存在を検証するための学術調査が、払田柵跡調査事務所や雄勝城・駅家研究会によって実施され、今年度も双方が調査を予定している。

【図6, 7】は造山集落周辺の航空写真と現況地形を表したものである（横手市教育委員会 2015）。地割については吉川氏と高橋氏が講演で触れるので割愛するが、地形については周囲が河川による浸食をかなり受けていることが確認できる。砂礫段丘Ⅲ面は高低差により段丘面が2面に分かれているが、高い方の白地の場所を見ると、北東と南西に方形地割があるように思われる。この白地の場所の北縁部分は「ラクダのコブ」ような形をしており、払田柵跡の外柵の平面プランが「ピーナッツ」状であることとの関連を指摘しておきたい。

5. 造山遺跡群周辺の遺跡変遷

古代の遺跡周辺の時期別画期により、古墳時代中期（5世紀後半）・飛鳥時代後期（7世紀後半）から奈良時代前期（8世紀前葉）、奈良時代中後期（8世紀中葉～後葉）、平安時代前期（9世紀前葉～中葉）、平安時代前期後半（9世紀後葉）から平安時代中期前半（10世紀前葉）の5時期に分類することが可能である（横手市教育委員会 2015、島田 2020b）。

以下では遺跡名と特徴を列挙し、今回の報告のまとめとする。

●古墳時代中期（5世紀後半）【図7】

遺跡の立地：

砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地：神谷地・小出・会塚田中B

砂礫段丘Ⅲ面の油川水系の微高地：一本杉

主な遺構：竪穴建物跡⇒カマドのない竪穴建物跡である。一本杉遺跡で検出されたものは、周溝を伴い、石川県四柳ミッコ遺跡が類似する。

掘立柱建物跡⇒小出遺跡と神谷地遺跡にあり、秋田県ではここだけの確認である。

主な遺物：土師器⇒日本海側の特徴を有しており、漆町編年13群新段階（5世紀後半）とされる一群である。全国的に斉一性をもつ土器様式である。

須恵器⇒全て搬入品である。大阪府の陶邑古窯跡群と考える須恵器で、5世紀中葉から後葉の年代である。数は10点未満で破片資料であるが、秋田県の大部分を占める。

要 点：全て集落跡である。大宮川水系及び油川水系に遺跡がある。低位段丘面の微高地に立地することや倉庫の可能性がある掘立柱建物の存在から、稲作との関係が深いと思われる。

●飛鳥時代後期（7世紀後半）から奈良時代前期（8世紀前葉）【図7】

遺跡の立地：

砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地：会塚田中B遺跡・樋向遺跡・石塚上台遺跡

砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地：釘貫遺跡・水里遺跡

主な遺構：竪穴建物跡⇒在地民（蝦夷といわれた人々）が構築したもので、カマドの煙道が地下式で長いのが特徴である。竪穴建物同士の重複はない。

主な遺物：土師器⇒全て非ロクロ成形で、東北地方標識資料である栗罎式土器に並行するものである。供膳具は坏・碗を主体とし、体部に稜を持ち、丸底である。また内面を黒色処理し磨いている。煮炊具や貯蔵具は壺・甕で、磨いているものが多い。

須恵器⇒全て搬入品である。律令国家との交流によってもたらされたもので、稀に竪穴建物跡から出土している。

要 点：全て集落跡である。古墳時代とほぼ同様の場所に立地していることから、生業としての稲作や漁業に対して、好条件の場所を選択していたと思われる。

●奈良時代中後期（8世紀中葉～後葉）【図8】

遺跡の立地：

砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地：会塚田中B・樋向・石塚上台・大見内・上大見内・八卦

砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地：釘貫・水里・十三塚・東槻・猫袋・南田東・南田・首塚

砂礫段丘Ⅲ面の台地：十足馬場南・十足馬場西・栗林・造山Ⅰ・造山Ⅲ・蝦夷塚北・蝦夷塚古墳群

起伏量100m未満の丘陵地Ⅱ（出羽山地）：末館A地点窯跡・末館B地点窯跡

主な遺構：竪穴建物跡⇒竪穴建物跡はカマドの煙道が地下式で長いものが主体であるが、短い煙道も確認される。竪穴建物同士の重複はない。

末期古墳⇒木棺直葬で、その周囲を円形に溝を掘り、その土をマウンド状に盛り上げた構造である。古墳時代の古墳と区別して末期古墳と呼ばれる。蝦夷塚古墳群の勾玉などの玉類は被葬者の副葬品であり、前代で活躍した人物の墳墓である。

材木列⇒蝦夷塚古墳群の調査で、段丘縁に東西方向に延びて構築されていた。城柵との関

連が指摘されている。

須恵器窯跡⇒奈良時代は律令国家によって城柵官衙に供給された須恵器の窯跡。末館窯跡については、藤原主事報告を参照されたい。

主な遺物：土師器⇒非ロクロ成形だが、底部の平底化や埴など須恵器模倣の新たな器種が出現する。須恵器⇒搬入品と初めて在地生産品が確認される。竪穴建物跡からは産地不明のものと中山丘陵窯跡群の竹原窯跡製品と末館窯跡製品が確認されるが、末館窯跡と考えられるものは、現在のところ造山遺跡群でしか確認されない。

鉄製品⇒蝦夷塚古墳の被葬者の埋葬品で、鉄鏃が中心である。

要 点：集落跡の他に末期古墳や須恵器窯跡が初めて確認される。集落跡は砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地で前代から引き続く。砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地では、在地集落である釘貫遺跡・水里遺跡が8世紀中葉で終末を迎える。それに対し、十三塚・東槻・猫袋・南田東・南田・首塚の各遺跡や砂礫段丘Ⅲ面の造山遺跡群も8世紀中葉から新たに出現する遺跡である。部分的な調査であり全容は不明であるが、竪穴建物が主体となっている。土器は非ロクロ土師器主体であったものが、須恵器の保有率が上がっており、律令国家との密接な関わりがあるとみられる。詳細は吉川氏・高橋氏の講演・資料を参照願いたい。

●平安時代前期（9世紀前葉～中葉）【図9】

遺跡の立地：

砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地⇒会塚田中B・樋向・石塚上台・大見内・上大見内・小出
中村Ⅰ遺跡・砂子田遺跡

砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地⇒東槻・柄内・水尻

砂礫段丘Ⅲ面の台地⇒蝦夷塚古墳群

砂礫段丘Ⅲ面の油川水系⇒柏木遺跡

主な遺構：竪穴建物跡⇒竪穴建物跡はカマドの煙道が地下式で長いものが激減し、短い煙道のものが確認されるが、竪穴建物自体が極端に少なくなる。

掘立柱建物跡⇒掘立柱建物で構成される集落が主体となっていく。単独で存在する建物が多いが、掘立柱並立建物や掘立柱と竪穴建物並立も少なくない。

末期古墳⇒蝦夷塚古墳群のみであるが、古墳周溝から奈良時代の土器とともに平安時代前期の土器も出土している。これは奈良時代に構築された古墳への祭祀行為と思われる。9世紀中頃までは埋葬儀礼が継続していたことが想定される。

主な遺物：土師器⇒非ロクロ成形のものは徐々に少なくなるが、無くなる訳ではない。それにとって代わるように新しい技術であるロクロ成形の土師器が増加する。坏・小型平底甕・長胴甕・鍋が基本的なセット関係となっている。

須恵器⇒末館窯跡はすでに操業を終えているので、中山丘陵窯跡群を中心に供給されたと考えられる。墨書土器が多くの遺跡から出土し、石塚上台遺跡では「厨」、中村Ⅰ遺跡では「雄」が確認されている。

要 点：集落は、砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地では前代から引き続くことは変わらない。砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地では東槻遺跡以外は継続せず、上流に2遺跡が確認されるのみである。造山遺跡群のある砂礫段丘Ⅲ面の台地では、平安時代の土器がほぼ確認されなくなり、集落自体も消滅した可能性は高い。

窯跡は、中山丘陵窯跡群での生産が最盛期を迎える。新たな技術であるロクロ土師器生産が中山丘陵の他、会塚田中B遺跡や柏木遺跡などの集落遺跡でも確認される。

●平安時代前期後半（9世紀後葉）から平安時代中期前半（10世紀前葉）【図10】

遺跡の立地：

砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地⇒会塚田中B・樋向・石塚上台・大見内・上大見内・八卦
正願谷地・中村Ⅰ・砂子田

砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地⇒水尻・東里東・町屋敷（五郎兵衛堰付近）

砂礫段丘Ⅲ面の油川水系⇒江原嶋1遺跡

主な遺構：竪穴建物跡⇒再び竪穴建物跡が増加するが、カマドや煙道の構造の規格性が異なるものが多い。

掘立柱建物跡⇒掘立柱建物で構成される集落に、庇付の中心建物と付属建物・倉庫・区画など地域有力者層の要素と思われるものが出現する。

主な遺物：土師器⇒非ロクロ成形のものが再び増加する。それ以上にロクロ成形が主体となっている。須恵器⇒中山丘陵窯跡群では9世紀末段階で須恵器生産が停止する。金沢窯跡群では10世紀前葉まで操業している。坏などの供膳具はロクロ土師器にとって代わられるが、貯蔵具は残る。

要 点：集落は、砂礫段丘Ⅳ面の大宮川水系の微高地にあり奈良時代から継続しているが、周辺にも遺跡が増加する。一貫して遺跡が立地し続ける場所である。大見内遺跡では庇付の中心建物と付属建物・倉庫・河川による区画が確認される。砂礫段丘Ⅳ面の石持川水系の微高地西側にある町屋敷遺跡や砂礫段丘Ⅲ面の油川水系にある江原嶋1遺跡などのように、これまで遺跡が確認されなかった場所にも庇付の中心建物と付属建物・倉庫・区画など、地域有力者層の屋敷地と思われる遺跡が出現するようになる。町屋敷遺跡の倉庫は『日本三代実録』にある山北三郡にあった倉庫の可能性が高い。江原嶋1遺跡では、灰釉陶器や腰帯の装飾である巡方が出土している。

【引用文献】

- ・秋田県雄物川筋土地改良区 1991 『雄物川筋利水の苦闘史』
- ・大山順造 1936 「沼柵と関根柵」『秋田考古會々誌第3巻第3号沼柵号』秋田考古會
- ・小西泰次郎 1966 『秋田県横手盆地の水理地質学的研究』地位調査所報告書第216集・島田祐悦 2020a 「沼柵解明の取り組み」『令和2年度第9回後三年合戦沼柵公開講座資料集』横手市教育委員会
- ・島田祐悦 2020b 「横手盆地の古代遺跡変遷」『令和2年度第9回後三年合戦沼柵公開講座資料集』横手市教育委員会
- ・島田亮三 1988 「後三年の役「沼の柵」」『雄物川町郷土史資料』雄物川町教育委員会
- ・三上礼子 1978 「秋田県における古墳遺跡について」『秋田考古学』第34・35合併号 秋田考古学協会
- ・宮本常一他 1976 『菅江真澄全集 第6巻』未来社
- ・横手市教育委員会 2015 『南田東遺跡』横手市文化財調査報告第36集
- ・横手市教育委員会 2020 『館尻遺跡』横手市文化財調査報告第50集

正

「後三年の役」当時の「沼の柵」予想図

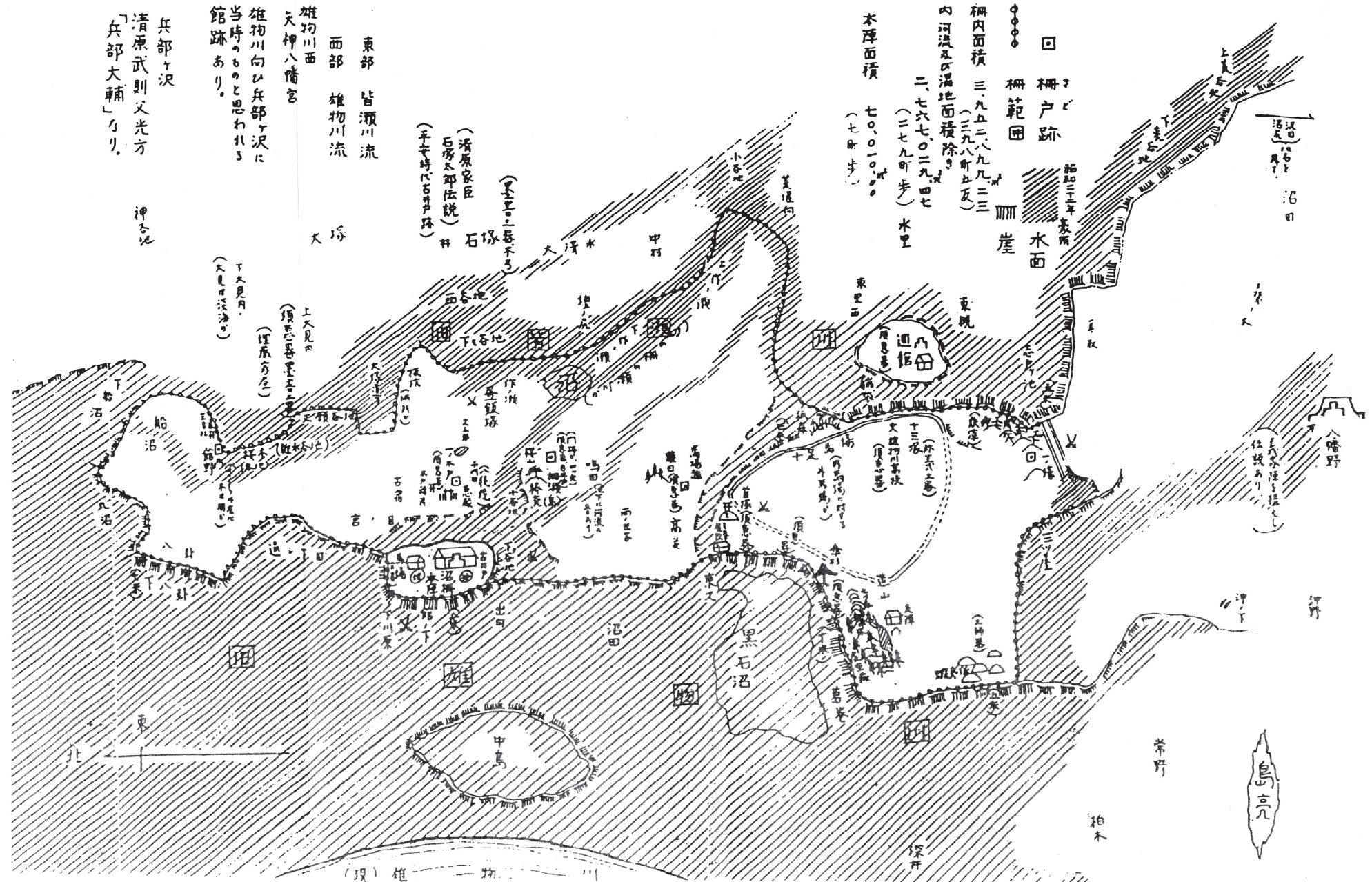


図1 沼柵想定図
3-7

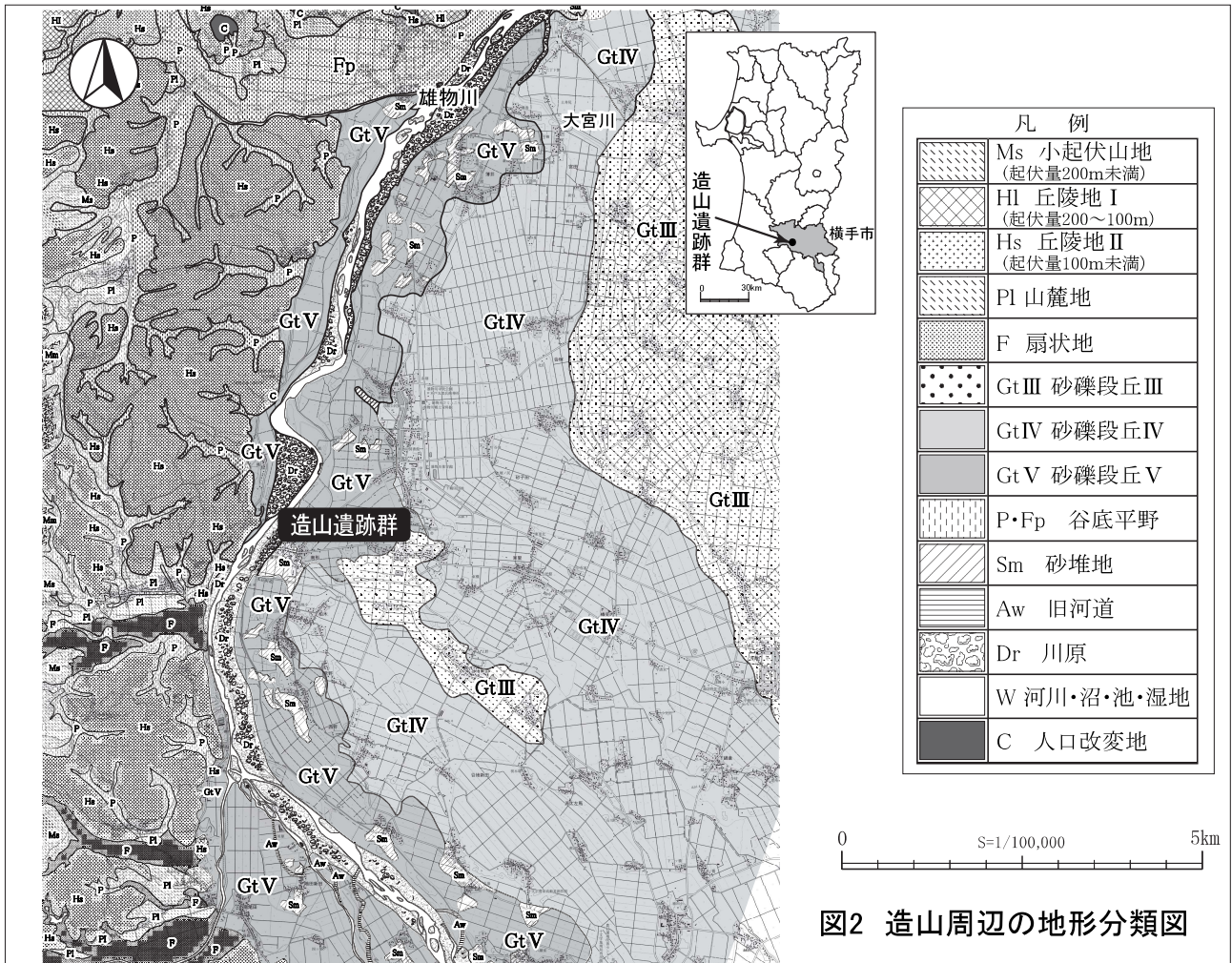


図2 造山周辺の地形分類図

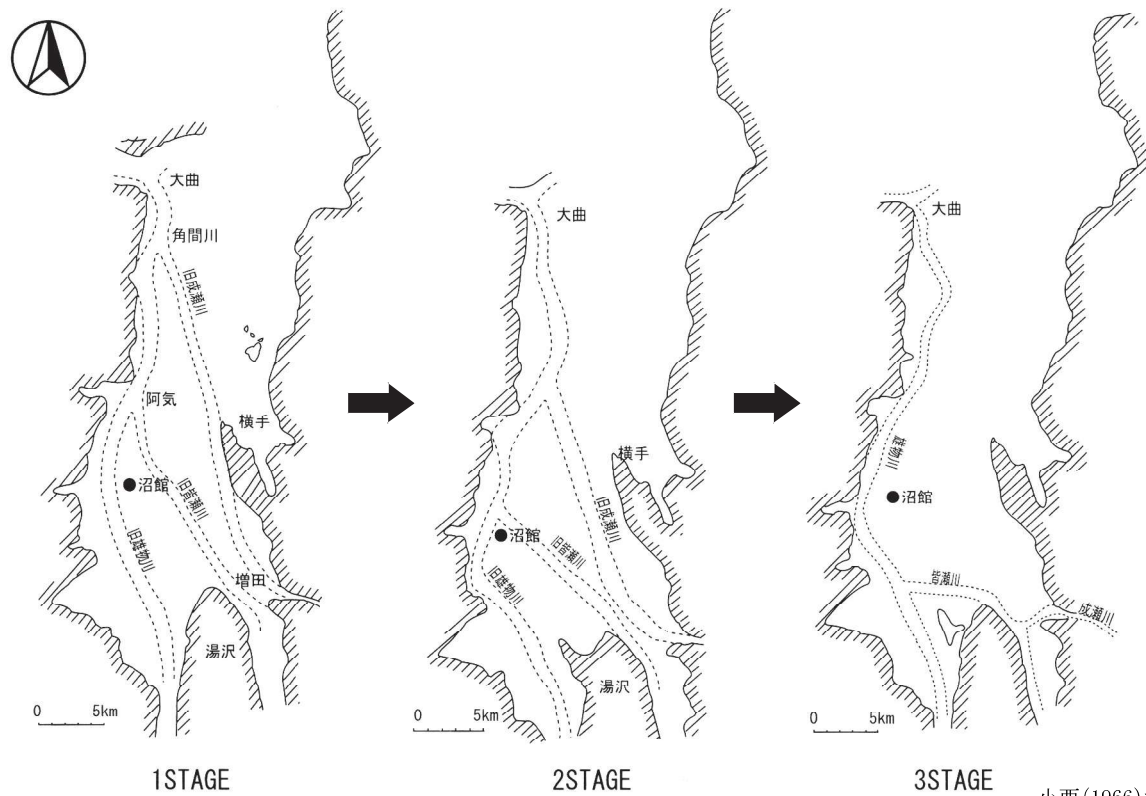


図3 雄物川の流路変遷図

小西(1966)から転載